
FAIRY TAIL ~五つの鳳~

レイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A I R Y T A I L ~五つの凰~

【著者名】

N 1 1 2 5 Y

【作者名】 レイト

【あらすじ】

滅竜魔導士とは、また違う特殊な魔法を持つ少年リオが妖精の尻尾くフェアリー・テイルで活躍する物語。この物語は原作に沿って話を進めていく方針ですが、物語の脱線、時間軸のズレなどが起こる可能性もアリなので御注意を！

オリジナル話も入れています

キャラ設定

名前

リオ・クリーレン

伝説と言われる五つの輝きを放つ鳳凰に育てられた少年。鳳凰の名はレーベンハイル・・・五つの輝きにはそれぞれ、再生、闇、光、風、地の力が込められている。

能力

その輝きに応じて力を扱う大地の魔法。光と闇はリオの力ではバランスを上手く保てないため自ら扱うのを禁止している。この五つの輝きを合わせることで初めて大地の魔法を使用できるようになる

鳳凰と言つてもドラゴンにくらべ攻撃力も防御力も劣るが、自らの魔力を消費する再生の炎でそれを補つている。

再生の炎は他者を癒すのには不向きで、天空魔法のように他者を癒すことはできない。

この小説では鳳凰を大地の守り神として扱っていきます

キャラ設定（後書き）

この設定には後から付け足していく予定？もあるかも、ですよ！

新たな家族を

「……が……魔導士ギルド、フェアリー・テイルか……」

今、俺……リオ・クリーレンはあるギルドに来ている。理由はいたつて簡単だ鳳凰……レー・ベンハイルに少しでも近づくには有名なギルドにでも入つて情報を集めるのが良い、そう判断したためだ。

俺はまだガキだ、一人で何かするには力が足りなすぎる……ちなみに歳はわからんねえ、理由は俺がどこで生まれたのかがわからない……ただ、わかるのはレーベンハイルが俺をここまで育て大地の魔法を俺に教えてくれたってことぐらいだ。

「つて、心の中で誰に説明してんだろう……」

ま、何にせよ入つてみなきや話は進まない。

「……」

あまりの騒がしさに絶句した……いや、二人のガキ……と、言つても俺もガキだが。

その二人が殴りあつてるし、めちゃくちゃ騒がしいしで最悪だ。もう少し静かにできないものなのだろうか……

「おー新入りか?……つて、まだ子供じやねえか」

「マスターって人に会いたいんだけれど……」

「マスター？ 奥にいるのが、うちのマスターだよ」

・・・・・ひさみ、あ・・・・・なんつけちまつたじやねえか。

とつあえず、俺はそのマスターって人に話しかけてみる・・・いや、
そうしないと話進まないしな！

「俺、ここにギルドに入りたいんだ・・・」

「ふむ・・・・・」

少しの間、真剣な眼差しで俺の顔を覗き込むとすぐ元の顔を変え

「オッケー！・！」

え・・・・? こんな簡単に? 試験とかないの?

「え・・・あの・・・・」

「ん?」

「いいんですか? その・・・・こんな、簡単に・・・・

「お前の田を見りやわかる、何か大切な理由でもあるんじやない

「あ、ありがとうございます! 俺、リオ・クリーレンツで言います

!」

「マ「ふむ、リオよ今からお前はこのギルドの一員。それを心していい
くんじゃぞ」

俺「はい！」

こんな感じで無事ギルドへ入ることに成功した・・・これで、一安心
か・・・

?「おいーお前、俺と勝負しろー」

俺「・・・・は?」

周りからは「ナツが新人と勝負するつよー」、「俺はナツに賭け
るぜ」などと・・・良くわからない声が聞こえてくる

ナ「俺はナツ、お前は?」

俺「リオだ、それで・・・何でいきなり勝負?」

ナ「理由なんか知らねえ!」

えー・・・俺・・・このギルドでやつていけるかなあ・・・?

ああ・・・俺・・・このギルドでやつていけるかなあ・・・?

新たな家族を（後書き）

次はナツとの戦闘です

滅竜魔導士

-リオ si de -

ナ「勝負だ勝負！！」

勘弁してくれ・・・俺はまだ力を使っこなせていないのに・・・
周りも盛り上がりがってるし断りづらいよな・・・仕方がない、やるしかねえな

俺「いいぜ、やつてやるよ」

はあ・・・災難だ

ナ「いくぞー火竜の鉄拳ーー！」

俺「ちよつー？ いきなりそれは・・・べはつ」

痛い・・・いや、痛すぎる。いきなり顔面殴りやがって・・・イラ
イラしてきたぞ

ナ「ん？お前弱いんだな・・・」

ブチツ・・・

俺「やつてやんよ、ツツ田の鼻たれ小僧」

俺が使つのは風・・・風の輝きだ

「なんだあれ・・・腕が翼に・・・?」

周りが騒ぎ始めるのも無理はない・・・魔力により形成された風が翼を形作つているのだから

俺「風刃螺旋舞!-!」

風の翼らせんびがおこす突風は全てを切り裂く刃となる・・・それが風刃螺旋舞

ナ「うおおー?」

って・・・特に効いてる様子も無いっすね・・・あ、滅竜魔導士つて体も丈夫なんだつけ?

ナ「なんだよ・・・やればできるじゃねえか、燃えて来たぞ!」

俺「ふう・・・」の力は翼だけでなく手に集めることで力を上げることも可能だ、お前ほどじやねえけど

ナ「上等だ!-!いくぜ!-!」

俺「俺もテンション上がってきたあ!-!ぶつ飛ばす!-!」

その後もどれだけの間戦闘が続いたことか……思い出したくも無い・・・まあ、楽しかったけどな

ナ「はあはあ・・・やるじやねえか・・・

俺「お前もな・・・」

?「リオ・・・とか言ったか?」

俺「え?あ、はい」

ミ「私は//ラジューン・・・エルザ側についたりぶつ飛ばすぞ
えー・・・話が見えねえよー・・・エルザって誰?っていうか、俺
は何に巻き込まれてるんだ?」

グ「俺はグレイ、あのクソ炎に付き合つてやるなんてお前もお人好
しだな」

ちげーよ、付き合わされたんだよ。無茶苦茶だ・・・

俺「はは・・・はあ、疲れた」

こんなお出向かえは初めてだ・・・卅、悪くないかな。

リ「はい、これどうだ。私はリサーナ、よろしくね」

俺「ありがと。俺はリオ、よろしく」

水を持っててくれた・・ああ、普通の人がいて助かったよ。それにしてもナツ強かつたな。

グレイやミラ、エルザも強いのかな?これは・・・俺が最弱フラグ?!

俺「神よ・・・俺にチカラをくれ〜・・・」

ミ「アイツ涙流しながら何か言つてるぞ・・・」

ナ「飯でも落としたんじやねえの?」

ああ・・・修行しないと・・・

こつして始まる俺の物語・・・あ、仕事しないと

俺「仕事、仕事・・・と」

?「これなんてどうだろうか?」

俺「へえ〜・・・バルカンて何?」

?「ふむ、これは森バルカンという奴でな・・・」

それで、君は誰だ・・・

俺「あのー・・・何は?」

エ「私はエルザ、気軽にエルザと呼んでくれ」

この人か・・・結構真面目なイメージがするけどな

その後に見た光景は凄かった・・・女の子は誰よりも強い・・うん、
そう思つよ。ミリもエルザも喧嘩したら凄いんだもん、死ぬかと思
つたわ

ひつて、俺のギルドでの生活が始まった

リ「何やつてんの?」

俺「ん?ちょっとギルドに入ったばかりの事を思い出してたんだよ・
・・」

ナ「また、勝負すつか?」

俺「しねーよ、馬鹿

俺がギルドに入つてもう、数年経つ。今では、もうみんな俺の家族

同然だ。

俺「さて、今日も張り切つて仕事に行くとしますか」

レ「あ、私も行く！」

この小さいのはレビュ・マグガーデン。最近コイシと仕事に行く回数が増えてきた。

今日は簡単だな、山賊退治だ。

レ「早く、早くーーー！」

俺「毎晩してーよ・・・・井、いっか

俺は今日も元気に妖精の尻尾をつけてます

仕組まれた依頼

-リオ side -

俺「今日の依頼は・・山賊の退治?・楽勝だな」

レ「やうやつて気を抜いてると怪我するよ?」

今俺とレビィはとある依頼を受け山賊の退治にやってきてる。最近いくつかの村が襲われているとの情報で、ちょうどフォアリー・ティルの近くまで来てるからグッドタイミングって感じだな。

俺「でか、お前チームは放つておいていいのかよ・・」

レ「大丈夫、それにリオもチームみたいなものでしょ?」

そうなのか・・知らなかつたよ・・・。俺は今のところチームは組んでおらず一人で行くか、誘われたら一緒に付いていくみたいな状態でいつレビィのシャドウ・ギアに組み込まれてたのかなんて知るわけがない

俺「はあ・・・ま、目的地までちよつと距離があるし少し休むか」

レ「そうだね」

その目的地は山の最深部、山賊の隠れ家つてとこだ。

俺「この依頼が終わつたらとつと休みでー・・・むしろ、旅行に

行きでーよ・・・

レ「じゃあ、私達で行こうよー旅行」

俺「そりだな・・・つー?」

レ「ん~どうしたの?」

俺「いや、なんでもねえよ

れつきから感じるのは胸騒ぎは何だ・・・?」の依頼には何か裏がある気がしてならない。それにレビィは気づいてねえみたいだけど、れつき・・・ほんの一瞬、凄い魔力を感じた。

それは山賊なんてレベルじゃない・・・多分、今の俺じゃ勝てない・・そんな力だ。もし、ソイツが襲つてきたらヤバイなレビィを庇つて逃げるのは無理だ。

俺「面倒なことが起つたりなつたりすると付けるか・・・」

レ「面倒なこと?」

俺「ああ・・・面倒なことだ」

-レビィ-side -

れつきからリオは何か考え込んでるみたいで何も喋らないし、何かを警戒しているみたいに見える・・・何かあるのかな・・・?

それに面倒なことってなんだろ・・・

とつあえず私は足を引っ張りなによつこしなくへやー。

·リオ s.i.d.e ·

あの後、山賊の退治じたいは案外簡単に終わった。

あの強大な魔力は山賊のものじゃなかつたつてわけか・・・じゃあ、一体何者だ・・・？

レ「ねえ、聞いてる?」

俺「え？あ、ああ悪い考え方しててな。何の話だつたつけ？」

レ「旅行の話だよーもつ・・・」

俺「悪い悪い、今度はちやんと聞くからだ。まずは場所だよな、やっぱ旅行といつたら・・・！」

レ「ー?」

今度はレビュも気付くだろうな・・・完全に俺らを狙つてやがる。

どいだ・・・どいかり・・・

俺「よけうーー。」

レ「え?」

空からの魔法・・・これほどの威力、一体誰が！？それよりも、このままじや間に合わねえ！！

身代わりになるしかねえな・・・！

俺「ぐつ・・・！」

レ「リオー！？」

この魔力・・・普通の魔導士じゃねえ！

とつあえず、レビィを逃がすことを考えひーー。

俺「風の羽ばたきよ・・・レビィを・・・彼女ができるだけ遠くに飛ばせーーー！」

俺の作りだす翼から一枚だけ羽を取り、レビィへ向けて魔力を開放するとレビィの体は宙を舞い遠くの街へと飛ばされる。

今度は相手の居場所がわかつたぜ、ここには俺が食い止める！

俺「岩隔壁ーー！」

俺の岩石の翼から羽が舞い、巨大な岩の壁が現れる

？「やはり・・・田障りだな、フェアリー・テイルは・・・」

俺「クソッ・・・どこの誰だか知らねえけど、アイツはもつーねえ。お前の相手は俺がしてやんよ」

? 「最初から君が狙いで来んだよ・・・不死鳥さん」

! ? ・・・俺が狙いだと?

俺「狙つた? 俺がこの仕事を引き受けない可能性もあつたのにか?」

? 「君には特別な魔法をかけたからな・・・問題ないぞ」

俺「俺が狙い・・・ね。ぶつ瀆してやるから来いよ」

? 「フンッ」

俺「ぐあああつ!!」

な、なにが起こった? アイツの手が光った瞬間痛みが・・・

? 「お前はまだ未熟過ぎる、私のギルドで鍛えなおしてあげよう・・・我が幽鬼の支配者でな」

俺「な!?」

瞬間俺は闇に包まれた・・・

私「そんな、足は引っ張らないって決めたのに! ! !」

- レビュイ s.i.d.e -

遠くから見て岩の壁が崩れていいくのが見える、あの魔法はリオがやらなければ崩れる」とはない……つまり、リオはある魔導士にやられちゃった……ってこと……

私「早く口に伝えないと……」

涙が溢れて止まらない……どうしたらいいの？

-三人称 side -

今フュアリー・テイルへ一人の少女が駆け込んできた。彼女の名前はレビィ、先ほどまでリオと共にいた魔導士である

レビィ「みんな……リオが……リオが……！」

息も上がり、まともに話すこともできない。ギルドの仲間も普段とは違つ雰囲気に困惑を隠せないでいるようだ

グレイ「どうした？ 落ち着いて話してみる

それから彼女は今まで起きたことを話した

ナツ「アイツがやられた……？ そんなことがあるはずがねえ……」

リオ「そうだ、アイツは強い……」

仲間たちも今だに事実を受け止められずに困惑している。

レビィ「私だけ・・・逃げてきた・・・！」

エルザ「無事で良かつた・・・それにしても何者なんだ・・・ソイツは！」

これが、リオが消えた今から一年前の出来事。

その後はリオも見つかっておらず死んだ・・・と、いうことになっている

-リオ side -

俺は一体どうなったんだ・・・わからぬえ・・・記憶も曖昧だ、
俺は一体・・・

「お前は我がファンタムロードの魔導士だ」

俺はファンタムロードの魔導士・・・?

「・・・お前は妖精を潰すのだ、ガジルと共に

そうか・・・フェアリー・テイルを潰すのが俺とガジルの仕事か

でも、何だ?この違和感・・・何かが引っかかるんだよな・・・

俺は誰なんだ・・・

ギルド襲撃

-リオ s.i.d.e -

俺「ガジル・・・俺たちはギルドを襲撃するんだよな・・・」

ガジル「そりだよ、何だあ？ビビッてんのか？」

馬鹿にしてるよううに笑ってるが別にどうでもいい・・・まるで自分の居場所を自分で壊してしまつような。そんな恐怖心が俺の心にあつた

俺「俺は本当に幽鬼の支配者のメンバーナんだよな・・・」

ガジル「ああ、そりだ」

何もかも滅茶苦茶だが、今は『えられた仕事をこなす・・・

そうして俺たちは深夜のギルドへと向かいぶつ壊した。主にガジルがやつたんだけど・・・

その次の日の夜・・・

ガジル「俺は少しやることがあるからテメエはここで待つてろ」

俺「やる」と・・・？

そつ言うとガジルはどこかへ行つてしまつた

俺「待つてろ・・・と、言われても暇だしな・・・行つてみるか」

そうしてガジルの向かつた方へと、腕を炎の翼に変え飛んでいく。何をやるつもりかは知らないが多分口クなことじやないんだろう

ガジル「何だ来ちまつたのか」

俺「・・・・」

そこで見たのは女が一人、男が一人・・・凄い傷で倒れていた。三人とも妖精の尻尾の魔導士だろう。その光景を見ているだけで怒りが湧いてくる・・・理由はわからない。

俺「やる」とつてのはコレか?」

ガジル「こつでもしねえとアイツらは動かねえからな」

その後ガジルは三人を木に貼り付け、幽鬼の支配者のマークを描きギルドへ戻つてしまつた。

・・・なんでこんなに悲しくなるのかはわからない・・・俺は無意識のうちに再生の炎を三人に灯していた、この炎は長時間体内で燃え続ける明日まで持つはずだ

レビイ「リ・・・オ・・?」

俺「俺の炎は他者を治す能力に長けているわけじゃないが傷の回復を早めてくれる・・・きっと明日の夜には良くなっているだろう・・

・」

レビューブック

俺の名前を知っている、何故知っているのか・・・そり聞こうとしたが、俺の名前を呟くと氣絶してしまった

他の二人にも同様に手当てをして、木から下ろしてやった。だが傷はまだまだ癒えてはいない・・・せつと朝になつても傷だらけだ。

俺は何かが心に引っかかったままギルドへと引き返した

懐かしき記憶

- 妖精の尻尾 side -

朝になりマグノリア南口公園・・・

そこには、ある木を中心に入れ集りができていた・・・「誰か下ろしてやつてくれ」「でもあのマークは・・・」などとこつ声が聞こえてくる

エルザ「すまん、通してくれギルドの者だ」

そう言つて妖精の尻尾S級魔導士のエルザが群集をかき分け進んでいく

グレイ「ジエラードロイー！」

ルーシィ「レビヤちゃんーー！」

傷つき倒れている仲間の元へと駆け寄つていくのは妖精の尻尾の魔導士、グレイとルーシィである

マカロフ「ボロ酒場までならガマンできたんじゃがな・・・ガキの血を見て黙つてる親はいねえんだよ・・・」

怒りを露にする、妖精の尻尾マスター・・マカロフ

マカロフ「戦争じゃ」

こいつして妖精の尻尾と幽鬼の支配者の全面戦争が始まることとなる。・

-リオ s.i.d.e -

俺「俺らはマカロフがマスターを潰すために争いの場から消えたところで襲撃するんだつたな・・・」

ガジル「そうだ、今日で妖精の尻尾も終わりだなあ」

マスター・ジョゼの計画通り妖精の尻尾はギルドへと攻めて来て、マカロフは最上階を目指し登つていった

ガジル「へへっ・・・一番やつかいなのが消えたトコでひと暴れしようかね」

俺「・・・」

俺とガジルは戦場へと降りていき、俺の顔を見た妖精の尻尾の動きが止まる・・・

エルザ「そんな何故だ・・・」

ぐれい「なつ・・・なんでお前が

ナツ「なんで・・・なんでお前がそんなトコにいるんだよーー！リオ

！！

俺「……俺にはわからない……何もわからないんだ」

腕を左の翼へと変え風を纏わせる。地と風の輝きを合わせた混合魔法。

俺「猛烈旋空くがんれつせんくう・・・五月雨――」

竜巻と並翼の羽こみる「重魔法

ナツ「べつ・・・俺達は仲間だろー！」

俺「なか・・・ま・・・・？」

ナツ「そうだ！お前は俺達妖精の尻尾の仲間だ！！」

俺「違う・・・俺は幽鬼の支配者の魔導士だ・・・」

ナツ「ちげーよ、だったら何でお前は泣いてんだ？」

！？・・・俺が・・・泣いている？

気が付けば魔法は消えていた。何が何だかわからない・・・俺は一体何者なんだ・・・？

俺を仲間と呼んだ魔導士とガジルが闘りあつてゐるが今はそれも氣にならない・・・俺は・・・

その考えはマカロフが上から落ちてきたことで中断された、さうやらジヨゼの計画通りにマカ・・・ロフを・・・マス・・・タ・・・

を・・・マスター・・・はマカ・・・ロ・・・フ?

俺は・・・

ジョゼ「さあ、リオさんも撤退を

俺「・・・よ

ジョゼ「早く撤退を・・・うるせえよ・・今はそんなのはどうでもいい・・・マスターはマカロフ?俺は幽鬼の支配者・・?何が何だかわからぬーぞオイ・・少し頭を冷やしてくる」

俺はジョゼの元へは行かずマグノリアを目指し飛び立つた

俺「俺は・・・どうしたらいい

・ジョゼ side ·

やれやれ、困ったガキだ。記憶の操作を施してもそろそろ限界か・・・
・妖精共を潰してから手に入れるつもりだったがあのガキも記憶を取り戻しかけてる。だったら・・・妖精に戻してあげるくらいなら一緒に消してあげるしかないよなあ?

変わらぬ思い

-リオ side -

・・・・今俺はマグノリアに来ている。良い街だ・・・俺はこの街を知っている。それで大好きなんだよな、きっと・・・

ズシイ・・ズシイ・・

何かが近づいてくる音が聞こえてくる。ふとそちらへ目を向けると・・

俺「嘘だろ・・・! ? まさか消し飛ばす気か・・・?」

わかつっていた、ジョゼが魔導集束砲ジュピターを使用することが

俺「ギルドを守らねえと! ! 俺達の街を! !」

その思いと共に俺は不死鳥へと姿を変え飛び立った

-妖精の尻尾 side -

エルザ「想定外だ・・・こんな方法で攻めてくるとは・・・」

六足歩行ギルド幽鬼の支配者がこちらへと進んでくるのが見える。

ジョゼ「魔導集束砲ジュピター用意・・・消せ」

ギルドから砲身が見え、魔力を溜めているのがわかった

エルザ「マズイ・・・全員ふせろオオオー！」

今この状況をどうかできる可能性があるのはエルザだけしかいない

エルザ「換装ーーー！」

エルザは金剛の鎧へと換装しジュピターの衝撃にそなえる

ナブ「いぐら超防御力を誇るその鎧でも・・・」

ナツ「エルザーーー！」

グレイ「ナツーーー！」はエルザを信じるしかねえんだーー！」

飛び出そうとするナツを必死にグレイが抑えている。

ジュピターが放たれた瞬間に皆が驚いた、ギルドへと届く直前に何かが壁となりジュピターを受け止めているのである

エルザ「アレは・・・フニックス・・・リオか！？」

一羽の不死鳥がジュピターをその身で受け止めているのである

リオ「ぐつ・・せりせるかアアアアーーーー！」

なんとかジュピターを受けきつたりオの体はその衝撃で吹き飛ばさ

れ妖精の尻尾へと激突する

ナツ「リオ！！」

ミカ「リオ！？まさか・・・生きて・・・？」

リオのボロボロに傷ついた体の傷口から炎が吹き出し傷が治つてい
くが完全に治癒することはできなかつた

カナ「なんて馬鹿なことを・・・！アンタの能力は不死身じゃな
いんだよ！？」

リオ「うつ・・・」めん・・・皆・・・今、思い出したんだ俺は
妖精の尻尾の魔導士だつてこと。守りたかつた・・・このギルドを・
・だから

ミカ「今は喋っちゃ駄目、まだ深い傷もあるし魔力も消費してる・
・」

・リオ side ·

ジョゼ「記憶を弄つてやつたのに入形にはなれなかつたな、リオ・
・それにマカラフも戦闘不能。エルザだけで我々を潰すことはでき
ない」

ナツ「記憶・・・？それで、リオは・・・テメエは許さねえ！？」

ジョゼ「ルーシィ・ハートファイリアを渡せ今すぐだ」

「ふざけんな!」「仲間を敵に差し出すギルドがどこのあるの?...」

「ルーシィは仲間なんだ!...」

沢山の声が聞こえる・・・しかしまだギルドはいつでなくっちゃな・・・

俺「オイ・・・ジョゼー・お前には渡さねえよ、俺はギルドを壊し盾を傷つけた・・・それでも、ギルドの・・・」イシラの仲間を奪おうとするなら俺はテメエを潰す・・・」

ジョゼ「リオ、その体で何ができるへ早く渡せ

ナツ「俺達の答えは何があつても変わらねえ!...おまえ等をぶつ潰してやる!...」

ジョゼ「ならば、そりに特大のジコペーターカベリサセマサム!...」
填までの15分間、恐怖の中であがけ!...」

ちっ・・・まで、アレを撃つのか・・・止めねえと・・・でも意識が・・・

・ジョゼー・

「リオをギルドに、ルーシィは・・・」

「せルーシィに眠りの魔法をかけるとリーダスに隠れ家へと運ぶ
頼み、自身はルーシィへと変身した

リオ「昔から無茶ばつかやつてたよね・・・リオ、でも生きていって良かつた・・・」

リオは一年前に謎の魔導士きつとジョゼだ・・・ジョゼに襲われて行方不明になつた。てっきり死んでしまつたとばかり思つていたけれど記憶操作をされ自分は幽鬼の支配者だつて思い込まされて無理やりギルドを襲わされた・・・だつて、リオの顔には泣いたあとがあつたから

さつき聞いた話ではレビィ達の回復が凄く早いらしい・・・きつと再生の炎を三人に灯したんだと思う・・・

今ボロボロになっているリオを守れるのは私だけだ、皆はギルドを守ってくれている。しつかりしなくちゃ

34

-リオ side -

俺は・・・

目を覚ますと、ギルドで寝かされていた。今ジョゼの話を聞いた限りではルーシィって子が捕まつたらしい・・・エルザも幽鬼の支配者の中に入つて行つたようだ

俺も・・・決着を着けよう。

待つてるジョゼ、俺の光でお前を消し飛ばすー！

絆の光を

-リオ side -

ジョゼの所へとたどり着いた時にはグレイ、エルフマン、ミラ、エルザもやられており今からトドメを刺そうとしているところだった

俺「さて、ゴミ掃除の時間だな」

ジョゼ「フン、その体で何ができる?」

確かに俺の体は傷だらけだ・・・だが、魔力は十分にある。

俺「闇を退ける破邪の輝きよ・・・」

俺の体に光が宿り背中に4枚の翼が現れる

ジョゼ「オイ・・・光の力は使えねえんじゃなかたのか?」

俺「・・・仲間を守るため、今この力を解き放つ」

一層輝きが増し、4枚の翼に力が宿る

俺「破邪閃光!!--」

翼から光の魔力が打ち出され、ジョゼにぶつかると光は弾け爆発した

ジョゼ「・・・ガキが、調子に乗ってんじゃねえ!!--」

ジョゼもこれからが本気ってここかな・・・

俺「イイネ、そんぐらいは頑張つてもうらないと」

俺の両手からは光の剣が現れる

ジョゼ「デッドウェイブ！……」

俺「ぐつ……」

光の剣で受け止めるが破壊され、後方に飛ばされる

ジョゼ「大口叩いた割には大したことねえな」

俺「邪悪なる魂に……閃光の裁きを……！」

ジョゼの頭上から光の雨が降り注ぎジョゼを包み込む

ジョゼ「この野郎オ……」

俺「まだ終わっちゃいねえ……封印せよ光滅の剣……魔封の双牙！……」

次々に作り出される光の刃がジョゼへと突き刺さり動きを封じる

翼に全力を込めジョゼへと向ける

俺「いくぞ・・・！」

俺「刹華光滅刃！……」

翼は大きな光の刃となり光の爆発でジョゼを包み込んだ

俺「はあはあ・・・やつたか・・・？」

ジョゼ「今のは・・・危なかつたぞ・・・」

ボロボロになりながらも立っていた・・・

ジョゼ「テメエは仲間もろとも消え失せろオオ！..！」

もう駄目か・・・？」今までやつたのに・・・！

マカロフ「もう休め・・・リオ。お前は良くやつた」

マスター・・・

俺「すいません・・・俺は・・・」

涙が溢れ止まらない

マカロフ「もう良い、わかつておる。全員この場を離れるんじや」

マスターに言われたとおりその場を離れギルドに戻ると、ファンタムのギルドがどんどん光に包まれていくのが見えた

エルザ「妖精の法律・・・！」

妖精の法律・・・術者が敵と認識した者のみを聖なる光で攻撃する

超上級魔法

幽兵たちも消滅し、ファンタムとの戦いは幕を閉じた

俺は自分の家族を傷つけすぎた・・・」「ここはいられない

マカロフ「どこへ行くんじゃ?」

俺「・・・俺は・・・仲間を傷つけました。たとえ、俺の意思では無い
いにしても・・・それは変わらない」「

マカロフ「そりやな・・・リオ貴様には・・・」

破門だらうな・・・

レビィ「待つてください!マスター!」

マカロフ「傷つけた分このギルドでみっちり働いてもらひにしよう
かの」

俺・レビィ「・・・え・・・?」

マカロフ「何を考えとったのかは知らんが、ここはお前の家のじやう
う?帰つて来て当たり前・・・わかつたか?」

俺「はい・・・ありがと」「さります!――

こつして俺は再び妖精の尻尾始めました!

神の子（前書き）

感想を書いてくれた方！ありがとうございます！

これからも頑張って更新していきますので、生暖かい視線で見守つ
てやってください　ｗｗ

評価くれた方もありがとうございますーこの評価が自信にも繋がる
ので更新する気力がもうわんさかと・・・！　ｗｗ

ではでは、本編をどうぞ

神の子

-リオ s.i.d.e -

今回の仕事は俺とレビィとジェットとドロイ、シャドウ・ギア + 1 のメンバーで行くことになった

ジェット「でもよ、今日は闇ギルドを潰すんだろ?」

ドロイ「俺達でできるのかな」

俺「まあ、なんとかなるんじゃねえか?」

レビィ「うーーーちょっと恐いかも」

ジェット・ドロイ「レビィは俺達が守るぜ!」

まあ、なんとかなりそうだよな。 実際

今回の相手は闇ギルド最近何かと悪い噂を聞く悪魔の狩人くデーモンハンターハッティングというギルドだ。調べによると強い奴はせいぜい一人、ライザーッっていう奴とゲイルって奴の二人だ

俺達の戦力でどうにかできるかわからんが、なんとかするしかないだろう。

俺「そうだな・・・俺が強いつて噂の一人引き受けよう。後はお前等に任せゆるぜ」

ジエット「何カツコつけよつとしてんだよ、もう一人は俺達でやつてやるぜ」「

ドロイ「さうそう、俺達シャドウ・ギアに任せとけ」

あー・・・心配だよ、色々と

レビィ「あつ、見えてきたよ。あそこが悪魔の狩人のアジトだ」

俺「よし・・・一気に終わらせるか」

ジエット・ドロイ「おひー

俺たちは悪魔の狩人へと攻め込む」となった

「何だテメエらー」

「俺達に喧嘩売つて無事でいられると思つなよー。」

さつそく戦闘開始なわけだが、用心していた二人が見つかなければ気がかりだ

俺「お前等に用はねえんだって、風刃螺旋舞ーー！」

幸い、相手は大したことが無く順調に仕事は進んでいた・・・奴らが現れるまでは

??「オイ・・・アイツら妖精の尻尾だよな？」

??「そうだ・・・俺はアノ中で一番楽しめそつな・・・そうだな、

アーティスト

俺「あらかた片付いたな・・・あとはお前等二人を潰すだけだ」

ライザー「ほり・・・俺はライザー、せいぜい楽しめてくれよ」

アイツがライザー……嫌な気配がするぜ。となると、もう一人の
ほうがゲイルか

ゲイル「女がいぬじやねえか！ひやつはーーーついてるぜーーー」

ジユットーリオ、ソイツは任せたぜ！」

「ひみつ」の口ひみつが何とかするから、俺達が何とかするから

レディー・ショウガ：ギアの腕の見せ所だね！」

老林の心も何間に上るがて思れなかつた

仲間・・?明らかに俺は向けて発せられた言葉だか心あたりがない

俺、何言ってんだ？

ライザー「そうだなあ・・・お前は鳳凰、俺は麒麟だ」

なに！？・・・え、どういう意味だ？

ライザー「俺たちは神殺しの魔法を持つ、滅神魔導士なんだよ。おわかり?」

俺「それで、仲間つか

ライザー「せつかく出合えたんだ、そんな『』共は捨てて俺ひとり來
いよ

『』・・・『』・『』・『』

俺「家族をゴミ扱いされ、まごそつですかって聞くとどうも、
消え失せるカスが」

ライザー「そりゃ、それは残念だ

-レバイス・side -

リオの方は戦い始めてしまったみたい。情報によると相手は風の魔
導士だつて聞いてたけど・・

ゲイル「お前は俺の女にしてやるから喜べえ！」

私「嫌だ！」

なんなのコイツ・・・・や、気持ち悪い

ジエット「レバイス下がつて先に俺が行くぜー！」

ドロイ「待てよジエット、俺もやるつて

ジエットヒドロイが相手に向かつて行く

ジエット「隼天翔！！」

ゲイル「駄目だねえ～そんなんじゃ」

ジエットの隼天翔は相手に届くことなく弾きとばされてしまった

ドロイ「ナックルプランター！！」

ゲイル「無理無理！～テンペストカッター！～」

ドロイのナックルプランターは竜巻によって切り裂かれてしまう。ビ
「じょり・・・」トイツ凄く強い・・・

私「立体文字！～T I R E！～」

ゲイル「おーおー熱いねえ・・・でも、まだ足りないよねー」

私の立体文字が竜巻によつてかき消されてしまつ

相手はまだ余裕で私達の魔法が通用しない・・・こつたこづつした
ら・・・

-リオ s.u.d.e -

ライザー「雷天角！！」

雷を身にまとい、雷の角で突撃してくる

俺「岩翼の守り……岩甲の盾……」

岩の翼を前に出し、亀の甲羅を思わせる盾を作り出し相手の突撃を受け止める

ライザー「やあんねん。それじゃあ俺の攻撃は防げねえ……」

俺「ちうっ……！」

岩の盾を貫通し、突撃してくるライザーを何とかかわすと岩の翼を戾し風の輝きを手に集める

ライザー「その程度か？」

俺「まだだ、風刃の舞い”百花繚乱”……」

ライザー「ぐあ……！」

ライザーを巻き込み数え切れないほどの風の刃で切りつける

ライザー「神殺しの魔法……流石に効くな。いくぜ、豪雷天……」

雷に囲まれる

俺「しまった……！」

ライザー「碎けろオ！天鎧……！」

雷の槍が降り注ぎ、体中を貫いていく

俺「ぐつ・・・！…傷が治ら・・・ねえ！」

カイザー「言つたろ・・・神殺しの魔法だつてな」

これが滅神魔導士、まさか再生の炎で塞がらない傷がでてくるなんてな・・・

これは意外とヤバい状況だ・・・光の輝きは、まだ体にかかる負担が大きいがやるしかねえ！

光魔の力

-リオ side -

俺「闇を退ける破邪の輝きよ・・・」

背中に4枚の翼が現れる

ライザー「見てくれが変わつただけじゃ俺には勝てないぜ?」

まだだ・・・俺には奥の手がある

俺「全てを無に帰す深淵の輝きよ・・・」

半分の翼の色が黒へと変わっていき魔力がさらに膨れ上がっていく

ライザー「急に魔力が・・・!? テメエ何しやがった!」

俺「少し無理しただけさ、行くぜ。光魔の槍グングール! !」

両翼から光が溢れ、一本の槍を作り出す

ライザー「天地雷皇・・」

ライザーの体に今までにないほどの雷が宿り魔力が上がっていく

俺・ライザー「滅神奥義! !」

俺「アブソリュート・ゼロ! !」

ライザー「破光神雷剣！！」

俺の投げた槍とライザーの作り出した剣が衝突し大爆発を起こした

ライザー「ぐ・・・あ

ライザーはどうやら気絶したようだ・・・俺も魔力をほとんど使つてしまい動けそうにない。

だが、仲間に俺の残りの力を・・・！

・レビィ side・

ドオオン！！

凄い爆音とともにライザーが飛ばされていくのが見えた

私「リオは勝てたみたいだね」

ゲイル「アイツがやられたのかよ・・・？チツ・・・コイツら片付けてあそこに倒れている奴をとつとと潰しちまつか」

ジェット「レビィは下がつてろー！」

ジェットとドロイが私の前に出て相手と戦っているが長くは持ちそうにない

やつぱり、私じゃ駄目なのかな・・・

そう思つた次の瞬間に私の中に力が流れてくるのを感じた。リオの方を見ると何かを言つていいようだ

リオ「お前ならやれる・・・思いつきりぶつ飛ばしてやれ・・・」

うん・・・私、頑張るよー！」

レビィ「立体文字!! Tempest(嵐)!! Estrella
a(流星)!!」

嵐は風の魔力で威力が上がり相手の風を打ち消すことができた。流星はリオの地の力と光の力、闇の力をあわせて発動することができた。まだ小さいけれど今ならアーツを倒せる!!

ゲイル「流星!??うああああーーー！」

ゲイルは普段から風を鎧のように纏わせていたから相手の攻撃をよける必要がなく、相手の攻撃は暴風に弾き返される。だから攻撃されると馴れていない。だから、今回の攻撃はよけることができなかつた

爆音と共にゲイルの倒れている姿が確認できた

私「リオ、私やったよーーー！」

リオ「ああ・・・頑張ったじゃんか・・・」

リオはもう魔力を使い切つている状態で動くことはできやつこもなかつたのでドロイに運んでもらつことにした

ライザーとゲイルも捕まえることもできたし一件落着！－

今回の仕事は大変だつたけど無事完了しました

-リオ s.i.d.e -

光と闇を同時に使つたのは初めてだ・・・むしろ、闇は使つたことすらなかつた。

内側から焼かれるようなダメージ、まだまだ修行が必要そうだ
レビィ達も何とかできたみたいだし良かつた・・・ああ眠い

いいや、もう寝ちゃおつ

俺は襲い来る睡魔に打ち勝つことができずに眠りにつくのだった

今日は休日！前編

・リオ si de -

さて、今日は何もせずにベッドで寝てしようとつん

レビィ「朝だよー！」

・・・・え

レビィ「早く起きとよリオ！」

・・・・え？

俺「何故にここにいるか、10文字以内で答えてみよ」

レビィ「出かけようよ、一緒に」

俺「文字数オーバーだ、おやすみ」

そうすると少し大人しくなったので、そのまま眠りこいつと思つていたのだが・・・

レビィ「立体文字、騒音ーー！」

俺「ノー！！勘弁してくれ。起きるからー！」

こうして無理やり連れ出されたのであった。これから一体どこへ行くところのか

レジィ「じゃ、向しようか?」

俺「そりだな・・・帰つて寝るとか?」

レジィ「却下」

即答ですよ、どうしたもんかね。特にやることもない

俺「テキトーに町を歩い」

レジィ「わかった」

散歩がそんなに楽しいもんなのか?良くわからんがレジィは楽しそうだ

side out

-レジィ side -

今日はリオと二人で出かけることにしたんだ。でも肝心な行く場所が無くて色々なお店を見てまわつたりしています

リオは横で眠たそうに欠伸をしている、もしかして迷惑だったかな・

リオ「別に迷惑じゃねえよ?」

私「え!?-声に出てた?」

リオ「いや・・・なんとなくそんな感じだつたからさ」

私「そ、そつか・・ふう」

良かつたー・・・迷惑じやなくつて。最近は大変そつな仕事ばかり
だつたからリオも疲れてるのかも・・

少し休憩しようかな

私「ちよつと休んでいい?」

リオ「え?おお、了解だ」

s.i.d.e o.u.t

·リオ s.i.d.e ·

レビィ「最近は仕事忙しそうだよね・・・疲れてる・・・?」

急にじどうしたんだ? 良くわからん奴だ

俺「いや? それにしても、たまにはひやつて町を歩くのもいいよ
な。レビィ面白いし」

レビィ「わ、私が面白い? うう」とーへ

あらり、顔を真っ赤にして・・・もしかして怒ってるのか?

「休憩は終わった、早く行くよー。」

そう言つてレイは俺の手を引張っていく

これは、まだまだ帰れそうにな
いな

今日は休日！後編

-リオ side -

結構、強引に連れ出された俺だったがそれなりにレビィと一緒に過ごす時間を楽しんでいた。

レビィ「次はどこに行こうか？」

俺「そうだな・・・そろそろ毎時だし飯を食いたいといふだな」

そうして飲食店を目指して歩いてみると、一つのペンダントが目にに入った。なんとなくだが、レビィに似合つたのでバレないよう購入し一日が終わることにプレゼントとしてあげることにした

その後は飯を食べて、近くの広場へと向かい色々なことを話した

レビィはそんなこと思つていないので、ジッシュトとドロイは大して役に立てないみたいだ

レビィ「そういえば、リオはS級試験は誰と組むの？」

S級試験とはその名の通りS級魔導士へとなるための試験である

俺「んー・・・考えてないな。それに俺が選ばれるかもわからねえし」

そう、俺は苦笑気味に答えた

レビィ「じゃあ、もし……もしだよ？私がS級試験に選ばれたらパートナーになってくれる……？」

レビィのパートナーか……まあ、レビィは色々心配なところもあるし都合が良いのかな

レビィ「やっぱ駄目かな……私弱いし小さいから……」

俺が黙り込んだので何か勘違いたせてしまったりして、それより小さいは関係無いんじやないか？

俺「俺で良ければレビィのパートナーにならせるよ」

レビィ「ほ、ほんと……！？」

俺「ああ、絶対にS級魔導士にしてやる。約束だ……それに、お前は弱くなんかねーよ魔導士は力だけが全てじゃないんだぜ？」

レビィ「う、うん……ありがと！」

そう言つとレビィは涙を流し始めてしまい、町の人達の視線が痛くなっていた

俺がレビィを泣き止ませることに成功するには既に田は沈んでいた

レビィ「すっかり暗くなっちゃったね……」

俺「だな・・・

今は俺もレビィも帰路についている。途中までは一緒にのでそこまで歩いていく

レビィ「でも本当に私でいいの?パートナー・・・」

俺「何回も言わせんなって・・・それに、お前でも奥いんじやなくてお前だからパートナーになるんだ」

レビィ「え、ええ・・・!?!」

何か言い方を間違えたのだろうか、レビィの顔は真っ赤だし・・・つてか、心配だからついて行つてやるんだけどな

そうして歩いてくるうちに別れ道へと来てしまった

レビィ「ここまでだね・・・今日は色々とありがとつ

俺「俺も楽しませてもらひたし俺のまつげやお礼を言わなくちゃな、ありがとつ

えへへ、とレビィは笑つてその後帰つて行つてしまいになつたところで今日買ったプレゼントのこと思い出した

俺「レビィーこれだこれ、今日のお礼つてわけじゃないけど・・・

俺はレビィのところへと走つていきペンダントを手渡した、最初は凄く驚いていたが『ありがとつ』と笑顔で喜んでくれたので買ったかいがあったとこうものだ

そして、レイを見送ると自分の家へと帰るのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1125y/>

FAIRY TAIL～五つの凰～

2011年11月15日12時23分発行